

# 特別活動でThe OECD Learning Compass 2030のAgencyと コンピテンシーの発揮を図るための指導方法 —小学校学級活動（1）を事例として—

安井 一郎、林 尚示、鈴木 樹  
眞壁 玲子、元 笑予、下島 泰子<sup>1</sup>

## Teaching and Learning Methods in the Extracurricular Activities for Exercising Agency and Competencies by the OECD Learning Compass 2030: A Case Study of Classroom Activities (1)

YASUI Ichiro, HAYASHI Masami, SUZUKI Tatsuki  
MAKABE Reiko, YUAN Xiaoyu, SHIMOJIMA Yasuko

### Summary

The purpose of this study is to deepen the examination of instructional methods for developing Agency and competencies in extracurricular activities in the OECD Learning Compass 2030 (OECD, 2019a). We will focus on elementary schools as the beginning stage of this process. The extracurricular activities of elementary schools have a wide range of content. The authors will focus on classroom activities, which are the main content of extracurricular activities at elementary schools. The purpose of this paper is to analyze a case study of classroom activities based on the Courses of Study (1), which has been carried out in schools as a class meeting.

We took a multifaceted approach: implementation of TPS and OMP, video recording and analysis of lessons, analysis of TPS and OMP recordings, and

---

1 執筆者の所属については以下の通りである。安井一郎（獨協大学）、林尚示（東京学芸大学）、鈴木樹（鎌倉女子大学）、眞壁玲子（文京学院大学）、元笑予（玉川大学）、下島泰子（流通経済大学）。

pre- and post-lesson questionnaires for the classes in three classes at a public elementary school in Tokyo. A draft was developed by the principal of the school where the TPS and OMP were to be implemented and drafted by the university faculty, and was revised after interviews with the teachers who were to implement the program. We compared the learning compass 2030 of the OECD, the evaluation perspectives of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), and the Courses of Study and selected nine items. The survey was conducted with the consent of the elementary schools in the study area.

The results suggest that, first, some of the Agency was enhanced when the children implemented TPS and the teacher worked to promote paired learning later in the practice phase. Specifically, we found an effect on the item “8. Did you work to make your class better as a member of the class today?” ( $t(29) = 2.281, p < .05$ ). Second, it was suggested that administering TPS at the appropriate time and administering the OMP at the end of the class may provide a metacognition of competency and may result in a more appropriate self-assessment. Specifically, the following items were found to be effective: 1. Were you able to listen to your partner’s opinions while accepting their thoughts at today’s class meeting? and 3. Were you able to present your opinions in a way that was easy for them to understand at today’s class meeting? ( $t(29) = 2.807, p < .01$ ;  $t(29) = 3.266, p < .01$ ) Third, there was a difference in the results depending on the timing of the introduction of TPS. Specifically, there was a difference between the results of groups 1 and 2 and the results of group 3.

## 1. はじめに

本研究では、特別活動で the OECD Learning Compass 2030 (OECD, 2019a) の Agency とコンピテンシーの発揮を図るための指導方法について検討を深めることを目的としている。特別活動は小学校、中学校、高等学校で実施される教育活動である。その中でも始まりの段階である小学校に着目する。小学校の特別活動は幅広い内容がある。その中で、小学校の特別活動の中心的な内容で

ある学級活動に着目する。学級活動の中でも、従来から学級会として教育現場で重視され実施されてきた学習指導要領に基づく学級活動（1）を事例として分析を進める。学級活動（1）は児童主体の活動であるため、Agencyとコンピテンシーの発揮が見とれやすいと考えたためである。なお、Agencyとは、「方向付けとなる目的を設定し、目標を達成するために必要な行動を見いだす能力」（OECD, 2019b）のことであるため、文部科学省の説明する主体的に学習に取り組む態度に対応させた。

具体的にはアクティブ・ラーニングの手法であるThink-Pair-Share（以下、TPS）とOne-minute paper（以下、OMP）を導入した。TPSとOMPは児童のAgency（主体的に学習に取り組む態度）とコンピテンシーの変化にどのような影響を与えるかということ問い（Research question）としたい。そのサブとなる問い（Sub question）としては、TPSを実施するタイミングによって効果がどのように異なるか、また、OMPはAgencyとコンピテンシーへのメタ認知能力をどのように育てるかということを設定した。

なお、the OECD Learning Compass 2030のAgencyとは、OECDのコンセプトノートでは、アイデンティティ、所属感、Well-being、動機づけ、希望、自己効力感、成長マインドセット（Growth mind set）、目的意識などを要素とする概念である。これは、自らの学修を調整し、粘り強い取り組みを行おうとすること（国立教育政策研究所, 2020）であるため、日本の指導要録における、特別活動の評価の観点としての「主体的に学習に取り組む態度」に対応させた。「主体的に学習に取り組む態度」は、児童がアイデンティティと所属感を持って学級に参加し、Well-beingに向かっていくことなどを内包しているためである。また、今回の学習指導要領改訂はOECDのEducation 2030事業との共同歩調で進んだため、the OECD Learning Compass 2030のコンピテンシーの構成要素としての知識、スキル、態度・価値や、新しい価値の創造、責任感、緊張やジレンマへの対処といったトランスフォーマティブ・コンピテンシーについては、行動の仕方を身に付けることや合意形成・意思決定（文部科学省, 2017）と重なるため、OECDの「知識・スキル」を指導要録の「知識・技能」に、「態度・価値」を「思考力・判断力・表現力等」に対応させた。

アクティブ・ラーニングの前身ともいえる協同学習（cooperative learning）はアメリカにおいては70年代に議論され、90年代においては既に定着している（Qin, Johnson & Johnson, 1995, Sharan & Sharan, 1992）。単なる「グループ活動」ではなく、「社会的相互依存」を目指し、構造化された活動であるとされ

てきた (Schul, 2011)。

異なる人種やジェンダー間でも平等な参加を促す協同学習は民主的で平和的な学習法であるとも指摘されている (Qin, Johnson & Johnson, 1995)。口数が少なく発表することが苦手な子どもと積極的なリーダータイプの子どもの一緒に活動することによって、相互に効果をもたらすことが実証されている。

「参加型学習」としての主体的、対話的学びを概観した岡崎 (2000) は、現代社会の多様な教育課題に対応するための教育活動、学習方法の特性として次の6点を挙げた。「学習者中心主義」「社会性」「能動性」「知識創造性」「対話主義」「経験主義」である (pp.25-28)。本研究で扱うTPSは個人で思考して新たな価値を創造するとともにペア学習で対話を行うため、上記の「知識創造性」「対話主義」が当てはまる。OMPは1時間の授業の経験を振り返るため「経験主義」が当てはまる。両者は学習者個人及び相互の能動的な活動を重視するため、「学習者中心主義」「社会性」「能動性」は、両者に当てはまると言えるだろう。

TPSはFrank Lymanによって元々は提唱された手法で、Kagan (1989) が発展させた数々の協同学習の手法の中の一つであり、最も使われている手法である。教師から与えられた課題について考え (think)、ペアになった子どもと議論し (pair)、クラス全体で討論する (share)。仮説の生成と修正、理論付けと応用、参加を促す手法である。批判的思考力、コミュニケーション力、問題解決力、協働する力など様々なコンピテンシーを育成することができる。

OMPはAngelo & Cross (1993) によって開発された評価ツールであり、高等教育でも用いられることが多い振り返りワークシートである。「今日の活動について」の振り返りを授業の終わりの方に1分ほどで行う活動である。子どもの振り返りを促すだけでなく、教師へのフィードバックともなる。

子どもが授業活動を振り返ることによって、メタ認知能力が育成されるが、二宮 (2016) は「自らの学習を振り返り、子どもたち自身が学習状況や成果を評価できるようになること」(p.192) と定義し、子どもたちが自律的な学習者となるためにはメタ認知能力の育成が不可欠であるとした。また、評価活動を学習成果の確認だけでなく、学習そのものの場と位置づけることの重要性を強調した。

ファデルら (2016) は「教育のメタ的な階層」の必要性を訴え、「子どもたちが振り返りをしたり、自らの学びについて学んだり、努力を促す成長的思考態度を身につけたり、目標に応じて学習や行動を調整する術を学んだりする」

(p.133) ことをOECDの「省察性」と位置づけ、「学び方の学習」であると結論づけた。

馬野(2018)は、アクティブ・ラーニングにおける振り返りの重要性を指摘し、授業の「コンテンツ」の評価、「コンピテンシー」の自己評価が、ペアでの活動を通して「自他の考え方の相違と共通性に気づき、課題を解決していくプロセスになっており、問題解決能力の育成につながっている」(p.18)としている。また、馬野は自己評価や振り返りの記述で表現することが学びを客観視することにつながり、振り返りをパフォーマンス評価として蓄積することができる点も指摘している。

## 2. 方法

本研究では、都内公立小学校の同学年3クラスに協力いただき、TPSとOMPの実施、授業のビデオ収録と分析、TPSとOMPの記録内容の分析、授業の事前事後質問紙(表1)といった多面的なアプローチをとった。TPS(表2)については、1組は授業時間の前の段階、2組は授業導入時の見通し(予測)の段階、3組は授業後半の実践の段階で実施した。実施タイミングを3段階にしたのは、実施タイミングによってTPS効果が異なるかもしれないと考えたからである。OMP(表3)は授業のまとめの後に実施した。実施学年は小学校第4学年である。第4学年になると、「集団の活動目標の達成に主体的に関わったり、協働的な活動に取り組んだりして、リーダー的な児童を中心に教師の力を借りなくても、ある程度の計画的な活動ができるようになり、自分たちできまりをつくって守ろうとするなどの主体性も増してくる(文部科学省, 2017)。さらに、質問紙調査に耐えうる学年として、Agencyとコンピテンシーの研究に最適であると考えた。なお、事前事後質問紙は次の手順で実施した。

### 手続き

実施校の校長と複数の大学教員で原案を作成し、実施していただく教諭からのヒアリングを行い、修正のうえ作成した。The OECD Learning Compass 2030と文部科学省の指導要録の評価の観点及び学習指導要領を比較し、9つの項目とした(表1)。なお、研究対象となる小学校から研究協力への同意を得て調査を実施した。

表1 事前事後アンケートの質問内容

1. 今日の学級会では、相手の思いを受け止めながら意見を聞くことができましたか。(知識・技能—人間関係形成)
2. 今日の学級会では、提案理由を考えて話し合いに参加することができましたか。(知識・技能—社会参画)
3. 今日の学級会では、相手にとってわかりやすく自分の意見を発表できましたか。(知識・技能—自己実現)
4. 今日の学級会では、友達のよいところやがんばったところを見つけることができましたか。(思考・判断・表現—人間関係形成)
5. 今日の学級会では、みんなの考えを合わせて学級の意見を決めることができましたか。(思考・判断・表現—社会参画)
6. 今日の学級会では、決まったことにもとづいて自分がこれから何をすればよいのか考えられましたか。(思考・判断・表現—自己実現)
7. 今日の学級会では、めあてを達成するために友達と協力することができましたか。(主体的に学習に取り組む態度—人間関係形成)
8. 今日の学級会では、学級の一員としてよりよい学級にするために努力できましたか。(主体的に学習に取り組む態度—社会参画)
9. 今日の学級会で決まったことを、実行するために取り組むことができましたか。(主体的に学習に取り組む態度—自己実現)

(事前質問紙については、「今までの学級会では、・・・できましたか。」として尋ねた。)

質問1-3はOECDのコンピテンシーの「知識・スキル」とともに指導要録の「知識・技能」に対応させている。文部科学省では特別活動については、資質・能力育成の視点として学習指導要領で「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」が示されているため、質問1-3はそれぞれ知識に関する「人間関係形成」、知識に関する「社会参画」、知識に関する「自己実現」の項目とした。同様に質問4-6はOECDの「態度・価値」、文部科学省の指導要録の「思考・判断・表現」に対応させた。質問7-9はOECDのAgency、文部科学省の指導要録の主体的に学習に取り組む態度に対応させた。回答は「1 できない 2 あまりできない 3 どちらでもない 4 だいたいできる 5 よくできる」である。

#### 調査人数

- ・回答者は小学校第4学年3学級の児童89名であった。

## 調査時期

- ・2019年11月に実施した。

## 質問紙調査の実施

- ・質問紙調査は、小学校第4学年3学級の学級担任が実施した。
- ・1組は若手の男性教諭、2組は学年主任の女性教諭、3組は若手の女性教諭であった。学年主任の教諭が中心となって特別活動の指導を学年で統一して進めていた。そのため、学級間のバイアスが小さいと考えこの学年を選定した。
- ・質問紙調査への回答拒否はなかった。
- ・その後の指導にも活用することを考え、記名式で実施した。
- ・質問紙の内容の倫理的な部分については、校長に検討していただき許可を得た。

表2 Think-Pair-Shareの内容

Think	議題についてのあなたの考えを書いてください。	
Pair	ペアの人の考えを聞いてどう思ったのかを書いてください。	
Share	ペアの人と話し合ったことにもとづいて、学級全体に聞いてもらいたい意見を書いてください。	

表3 One-minute paperの内容

今日の話合いのめあては達成できたと思いますか。	
今日の話合いを進めるために、自分にできたことはどのようなことですか。	

(林尚示、下島泰子)

## 3. 結果と考察

### 3.1 1組と2組の事例

1組では、事前事後の質問紙調査からはコンピテンシーとAgencyについての有意な差はなかった。コンピテンシーに関する質問は質問1-6である。これらのうち、2組では、質問3「今日の学級会では、相手にとってわかりやす

く自分の意見を発表できましたか。」に有意な変化があった ( $t(30) = -2.971$ ,  $p < .01$ ) (事前:  $M=4.03$ ,  $SD=0.76$ ; 事後:  $M=3.33$ ,  $SD=1.32$ )。その一方で、Agencyの有意な差はなかった。

このことから、TPSは授業前あるいは見通し(予測)の段階での実施は効果的ではない可能性がある。

### 3.2 3組の事例

TPSをまとめの直前に実施した3組では、コンピテンシーとAgencyともに有意差が見られた。そこで以下では、3組の結果について考察を行う。

まずは、3組の学級活動(1)の指導案(表4)をもとに、授業の特徴について説明する。議題は「みんなで気持ちよく掃除をするための工夫を考えよう」である。本時のねらいは「学級の皆が気持ちよいと感じられる掃除の仕方を考えてこれから何をすればよいか考える」であった。これは、学級の他の児童のことを考えさせる内容であり、社会的なWell-beingを意識させようとしていると言える。また、「これから何をすればよいか」というねらいは、児童に主体的な行動をさせようとしているため、Agencyの発揮をめざすものと言える。

表4 事例とした授業の学級活動(1)の指導案

段階	進め方	指導上の注意	評価
見通し(予測)	議題の提示	話合いのルール・目的を共有する	事前に自分の考えをあらかじめ、準備し、話合いに臨んでいる。 (主体的に学習に取り組む態度)
実践	話合いTPS	みんなで進んでやってみたいことを具体的に決める	相手の思いを受け止めたり聴いたり、相手の立場や考え方を理解する。(人間関係形成) 自分もよく、みんなもよくなるために自分の役割を果たす。(社会参画) みんなで取り組んでいくことを決める(自己実現)
振り返り	OMP		話合いのよかったところや課題を見つけることができる。

(授業者の指導案を執筆者が簡略化した。)

本時の指導計画は3段階で構成されており、見通し(予測)、実践、振り返りで進めている。この部分については、OECDのAARサイクル(Anticipation-



Action-Reflection Cycle) で構成されている。表5は授業の映像をもとに、Agencyとコンピテンシーの発揮場面を抽出したものである。

番号1は、TPSのPair活動の場面である。ここでは、個別のThink活動後に、隣か前後の2人組によって意見を交換しており、コミュニケーション力、協働する力のコンピテンシーが発揮されている場面と考えられる。映像からは、実際に話し合いを行っている様子が確認できた。また、Pair活動時のワークシートからは、「いい案だったので私もさんせいです」、「いろんないけんがあつてぼくが思いつかなかつたことをかいていたのでかんしんしました」、「とてもいい案で、私もさんせいしました」等の記述が見られた。

番号2は、TPSのShare活動の場面である。ここでは、個別のPair活動後に、クラス全体で意見を交換しており、コミュニケーション力、協働する力のコンピテンシーが発揮されている場面と考えられる。また、OMPのワークシートからは、「ともだちにうまくおしえられたと思う」、「友達の意見をサポートすること」、「発言はできなかったけど友達の意見を聞いてうなずいたりして自分の意見を表せた」等の記述が見られた。

番号3は、TPSのShare活動の場面である。ここでは、個別のPair活動後に、クラス全体で意見を交換しており、コミュニケーション力、協働する力のコンピテンシーが発揮されている場面と考えられる。また、OMPのワークシートからは、「司会で話し合いをすすめる」、「司会グループで時間管理」、「黒板を書くのをがんばつたこと」、「みんなが見やすい黒板を書けた」等の記述が見られた。

表5 3組のAgencyとコンピテンシーの発揮場面

番号	場面の説明
1	コミュニケーション力、協働する力のコンピテンシーが発揮されている場面
	Pair活動として、隣あるいは前後のペアによる、話し合い活動において、自分の意見を言ったり、相手の意見を聞いたりしている。
2	コミュニケーション力、協働する力のコンピテンシーが発揮されている場面
	Share活動として、クラス全体で意見を共有する活動において、自分の意見を発表している。
3	学級の一員としてよりよい学級にするための努力によってAgencyが発揮されている場面
	Share活動において、司会や黒板係の役割を果たし、話し合い活動を進行したり、みんなの意見を黒板に書いたりしている。

(各番号の上段は場面の説明、下段は児童の活動)

TPSを実践段階後半に導入した4年3組では、Agencyに関わる質問8の結果が、事前に比べて、事後が高まっている。それに加えて、キー・コンピテンシーの知識とスキルに関わる質問1、質問3も同時に高まっている（表6）。

表6 3組の事前事後分析結果

質問項目		平均値	標準偏差	<i>N</i>	<i>t</i> 値	有意確率 (両側)
項目1	事後	4.24	1.41	29	2.807	0.009**
	事前	3.86	1.27	29		
項目2	事後	4.00	1.54	29	0.550	0.586
	事前	3.90	1.37	29		
項目3	事後	4.07	1.49	29	3.266	0.003**
	事前	3.52	1.35	29		
項目4	事後	4.17	1.36	29	0.972	0.339
	事前	3.97	1.38	29		
項目5	事後	3.66	1.59	29	0.881	0.386
	事前	3.45	1.45	29		
項目6	事後	4.10	1.35	29	1.491	0.147
	事前	3.83	1.39	29		
項目7	事後	3.93	1.51	29	1.158	0.257
	事前	3.69	1.56	29		
項目8	事後	4.03	1.45	29	2.281	0.030*
	事前	3.69	1.39	29		
項目9	事後	4.38	1.29	29	1.625	0.115
	事前	4.03	1.48	29		

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

質問8は「学びに向かう力・人間性等」の観点で、「社会参画」の視点から設定した項目である。具体的には、「今日の学級会では、学級の一員としてよりよい学級にするために努力していこうと思いましたが。」とたずねている。TPSを通して主体的に参加したうえで対話的に合意形成することで、実践への意欲が高まったようである（ $t(29) = 2.281$ 、 $p < .05$ ）。今回の授業からは、TPSは児童のAgency発揮について効果が期待できることがわかった。これは、表

5の番号3の場面で、意見を発言している場面や、学級の一員として役割（司会、黒板係）を果たそうとしたという趣旨の記述が見られたこととも整合している。

なお、質問1と質問3は「知識・技能」の観点で、質問1は「人間関係形成」の視点、質問3は「自己実現」の視点から設定した項目である。具体的には、「今日の学級会では、相手の思いを受け止めながら意見を聞くことができましたか。」と「今日の学級会では、相手にとってわかりやすく自分の意見を発表できましたか。」とたずねている。自己の考えを深め（Think）、ペアで話し合い（Pair）、学級で共有する（Share）という活動を意図的に実施することで、友達の良いところやがんばったところが見つけられるようになったと考えられ（ $t(29) = 2.807, p < .01$ ;  $t(29) = 3.266, p < .01$ ）、これらは、表5の番号1や2の場面で、相手の意見を尊重している記述が見られたこととも整合している。

（元笑予、眞壁玲子、鈴木樹）

#### 4. 結論

本研究では、小学校の学級活動（1）を事例として、特別活動で the OECD Learning Compass 2030のAgencyとコンピテンシーの発揮を図るための指導方法について考察を深めてきた。その結果、次の3点について明らかにすることができた。

1つ目に、実践段階後半に児童がTPSを実施し教師がペア学習を促進させる働きかけをすると、Agencyの一部が高まることが示唆された。具体的には、「8. 今日の学級会では、学級の一員としてよりよい学級にするために努力できましたか」の項目で効果が見られる。

2つ目に、適切なタイミングでTPSを実施し、授業の最後にOMPを実施すると、コンピテンシーについてメタ認知ができ、より適正な自己評価となる可能性があることが示唆された。具体的には、「1. 今日の学級会では、相手の思いを受け止めながら意見を聞くことができましたか」「3. 今日の学級会では、相手にとってわかりやすく自分の意見を発表できましたか」の項目で効果が見られる。

3つ目に、TPSの導入のタイミングによっても、結果に差があることがわかった。具体的には、1組と2組の結果と3組の結果に差があった。

なお、事例研究には量的研究と異なる利点があるが、一方で、授業の課題と

具体的なねらいによっては、効果項目にぶれが生じる可能性がある。薬学や医学などでランダム化比較試験 (Randomized Controlled Trial) が実施されることと比べると、教育学の授業実践からエビデンスを求める方法には一定の弱みもある。この克服は今後の課題である。

(安井一郎)

## 謝辞

本研究はJSPS科研費18K02563及び東京学芸大学次世代教育研究推進機構の成果の一部である。授業研究及び質問紙調査にご協力いただいたA市立B小学校の先生方に心から感謝申し上げます。映像分析に関して元東京学芸大学特命助教布施様にご協力いただいた。心から感謝申し上げます。

## 参考文献

- 馬野範雄 (2018) 「コンテンツとコンピテンシーの両立を図る授業開発——『生活 (小)』の実践を手がかりにして」 関西福祉科学大学紀要第22号, pp.15-23
- 岡崎裕 (2000) 「人権教育と参加型学習」 中川喜代子・岡崎裕 編著『参加型人権教育論 学校における人権教育の実践的課題』 明石書店, pp.15-34.
- 国立教育政策研究所 (2020) 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 特別活動』 Retrieved from [https://www.nier.go.jp/kaiatsu/pdf/hyouka/r020326\\_pri\\_tokubetsuk.pdf](https://www.nier.go.jp/kaiatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_tokubetsuk.pdf), (June 12, 2021)
- 二宮衆一 (2016) 「イギリスにおける『学習のための評価』による形成的評価の再構築」 田中耕治編著『グローバル化時代の教育評価改革 日本・アジア・欧米を結ぶ』 日本標準, pp.184-195.
- 文部科学省 (2017). 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別活動編』 Retrieved from [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/13/1387017\\_014.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2019/03/13/1387017_014.pdf) (June 12, 2021)
- C. ファデル, M. ビアリック, B. トリリング著, 岸学監訳 (2016) 「Chapter 6 メタ学習の次元」 『21世紀の学習者と教育の4つの次元 知識, スキル, 人間性, そしてメタ学習』 北大路書房, p.133.
- Angelo, T. A. & Cross, K. P. (1993). *Classroom Assessment Techniques: A Handbook for College Teachers (2nd ed.)*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- Qin, Z., Johnson, D. W. and Johnson, R. T. (1995). The Cooperative Versus Competitive Efforts and Problem Solving. *Review of Educational Research* Summer 1995, Vol. 65, No. 2, pp.129-143
- Kagan, S. (1989) The structural approach to cooperative learning, *Educational leadership*, 47(4), pp.12-15.
- OECD (2019a). Future of Education and Skills 2030, Conceptual learning framework Concept note. Retrieved from <https://www.oecd.org/education/2030-project/>

teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD\_Learning\_Compas\_2030\_concept\_note.pdf (April 27, 2020)

OECD (2019b). 「2030年に向けた生徒エージェンシー」 Retrieved from [https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD\\_STUDENT\\_AGENCY\\_FOR\\_2030\\_Concept\\_note\\_Japanese.pdf](https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf) (June 12, 2021)

Schul, J. E. (2011). Revisiting an Old Friend: The Practice and Promise of Cooperative Learning for the Twenty-First Century, *The Social Studies*, 102.2, pp.88-93.

Sharan, S., and Sharan, Y. (1992). *Expanding Cooperative Learning through Group Investigation*. New York: Teachers College Press.

